

田野町文化財調査報告書第4集

まる の  
丸 野 第 2 遺 跡

県営農地保全整備事業七野地区に  
伴う埋蔵文化財発掘調査概要

1987

田野町教育委員会

田野町丸野遺跡正誤表

図版目次	誤	正
図版 7	B地区	A地区
P 4 4行	七野地区圃場整備事業	七野地区農地保全整備事業
P 32 15行	都原市周辺	都原周辺
P 33	『九州考古学』第15巻 7号	『九州考古学』15号
図版 7	B地区	A地区

田野町文化財調査報告書第4集

まる の  
丸 野 第 2 遺 跡

県営農地保全整備事業七野地区に  
伴う埋蔵文化財発掘調査概要

1987

田野町教育委員会

## 序

この報告書は、宮崎県の委託を受けて、昭和61年5月6日から同年9月30日までの5ヶ月間にわたり、田野町七野地区特殊農地保全整備事業地内に所在する丸野第2遺跡の発掘調査を実施した記録であります。この調査では、縄文時代や弥生時代の土器が多量に出土し、住居跡、土塙等も多数発見されました。特に斜格子線刻の石刀が出土したのは注目されます。これらは、宮崎県における貴重な研究資料となることと思いますので、今後、本報告書が広く活用されることを願うものであります。終わりに、発掘調査から報告書刊行に至るまで、終始熱心に御指導下さいました諸先生方をはじめ、本調査に深い御理解と御協力を賜りました関係機関、地元町民各位に心から感謝申し上げます。

昭和62年3月31日

田野町教育委員会

教育長 種子田 栄 幸

## 例 言

1. 本書は、田野町七野地区の県営農地保全整備事業に伴い、昭和61年度に実施した丸野第2遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は、田野町教育委員会が主体となり、県文化課主任主事 長津宗重が担当した。
3. 調査組織は次の通りである。

調査主体 田野町教育委員会

教 育 長 種子田 栄 幸

社会教育課長 妹 尾 博

補佐兼

社会教育係長 新坂 政光

社会教育係 後藤 哲男(担当)

調査員 長津 宗重

調査補助員 寺師 雄二

調査協力 面高 哲郎・永友 良典(宮崎県教育庁文化課主任主事)

北郷 泰道・近藤 協(〃〃主事)

管付 和樹・谷口 武範(県総合博物館埋蔵文化財センター主事)

4. 遺物の復元・実測図作成・トレースは、

に協力を頂

いた。

5. 本書の執筆は、後藤・長津が分担し、文責については目次に明記している。
6. 本書の編集は長津が当った。
7. 土器の色調は農林省農林水産技術会事務局監修の標準土色帖による。本報告の方針は磁北である。またレベルは海拔絶対高である。

## 本文目次

第Ⅰ章 序説 .....	1
1. 発掘調査に至る経緯 .....	(後藤) .....
2. 丸野第2遺跡周辺の歴史的環境 .....	(長津) .....
第Ⅱ章 遺構と遺物 .....	(長津) .....
1. 調査区の設定と概要 .....	4
2. 包含層の状態 .....	4
3. 縄文時代の遺構と遺物 .....	8
4. 弥生時代の遺構と遺物 .....	8
第Ⅲ章 まとめ .....	(長津) .....
	32

## 挿図目次

第1図 丸野遺跡周辺の遺跡分布図 .....	2
第2図 丸野遺跡地形図 .....	5
第3図 A地区西壁土層断面図 .....	6
第4図 遺構分布図 .....	7
第5図 縄文早期土器実測図 .....	9
第6図 B地区遺構分布図 .....	11
第7図 縄文後期土器実測図(I) .....	14
第8図 縄文後期土器実測図(II) .....	15
第9図 縄文後期土器実測図(III) .....	16
第10図 縄文後期土器実測図(IV) .....	17
第11図 縄文後期土器実測図(V) .....	18
第12図 縄文後期土器実測図(VI) .....	19
第13図 縄文後期土器実測図(VII) .....	20
第14図 縄文後期土器実測図(VIII) .....	21
第15図 縄文後期土器実測図(IX) .....	22

第16図 縄文後期土器実測図 (X) .....	23
第17図 縄文後期土器実測図 (XI) .....	24
第18図 縄文後期土器実測図 (XII) .....	25
第19図 縄文後期土器実測図 (XIII) .....	26
第20図 石刀実測図 .....	26

## 表 目 次

第1表 壺穴住居観察表 .....	9
第2表 縄文早期土器観察表 .....	10
第3表 縄文後期土器観察表 .....	27

## 図 版 目 次

図版 1 A 地区遠景（北から）・A 地区壺穴住居とピット群	
図版 2 B 地区壺穴住居群（東から）・B 地区壺穴住居群（南から）	
図版 3 C 地区壺穴住居群（北から）・A 地区縄文後期土器出土状況	
図版 4 縄文早期土器・打製石鏃・B 地区 S A 2 ・ S A 3 出土縄文土器	
図版 5 B 地区 S A 3 出土縄文土器・B 地区 S A 4 ・ S A 5 出土縄文土器	
図版 6 B 地区 S A 8 山土縄文土器・B 地区 S A 8 縄文土器	
図版 7 B 地区出土縄文土器・B 地区出土縄文土器	
図版 8 C 地区 S A 1 出土縄文土器, A ・ B 地区出土磨消縄文土器	
図版 9 B 地区出土石刀, A ・ B 地区出土磨製石斧	
図版10 A ・ B 地区出土磨石・敲石・円板状石器, A ・ B 地区出土石錐	

# 第Ⅰ章 序 説

## 1. 発掘調査に至る経緯

宮崎県宮崎郡田野町において、昭和61年度から、七野地区の県営特殊農地保全整備事業が行なわれている。それに先立ち、事業区内の埋蔵文化財の調査として昭和60年12月に田野町教育委員会が分布調査を行ない遺跡の存在が確認され、更に県文化課によって再確認が行なわれた。調査により事業区内に遺跡の存在が判明したため、宮崎県中部農林振興局と埋蔵文化財の保護についての協議が行なわれたが、事業施行上、保存が困難な部分が多く、とりわけ今回発掘地は、高台にあり、事業との並行発掘が困難だということで、昭和61年度に記録保存の処置をとることになった。昭和61年3月に、地元との協議も終わり、同年5月6日～9月30日まで発掘調査が行なわれた。

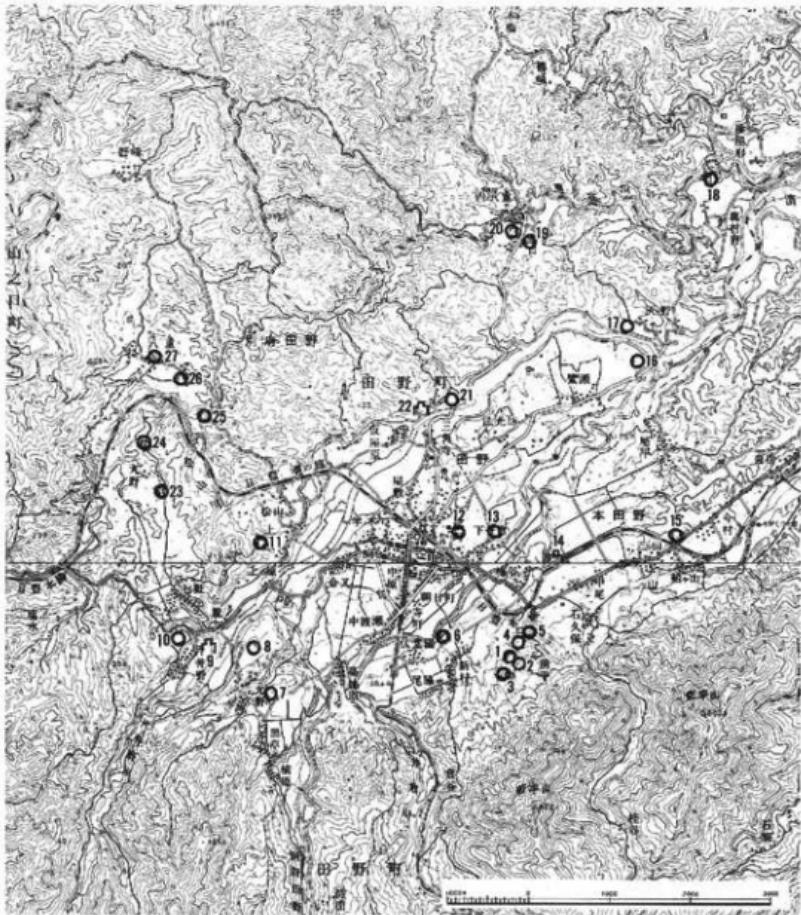
七野地区事業区内の発掘調査は、今回より始まり、事業区内他地域についても今後、調査を行なってゆく。調査は、田野町教育委員会が主体となり、宮崎県文化課 長津宗重氏が担当した。

## 2. 丸野第2遺跡周辺の歴史的環境

田野町は宮崎県の中南部の宮崎市より南西約20kmに位置する。田野盆地は南那珂山地に属し、標高1200～1400mの台地を形成している。田野盆地の北西部の山地は標高2000～2800mと低いのに対して、南部の山地は標高600m級である。盆地の北部の山地裾を清武川が南北方向から北東方向へ流れている。

丸野第2遺跡は田野盆地の北西部の南に伸びる台地の最高位（標高1200m）に位置する。当遺跡の北々西約1.5kmには丸野第1遺跡があり、縄文後・晩期の土器が出土している。丸野第2遺跡の歴史的環境を知るために、町内の遺跡を時代順に概観する（第1図）。

旧石器時代の遺跡としては荻ヶ瀬遺跡と町内でナイフ形石器、齊掛で細石核が表揚されていて、昭和58・59年に前平地区で芳ヶ迫第1・3遺跡、札ノ元遺跡で発掘調査が行なわれた。芳ヶ迫第1遺跡では、2基の集石遺構間の径5mの範囲内にナイフ形石器3・剥片・尖頭器1・三稜尖頭器1・彫器1・插器1などが出土している。芳ヶ迫第3遺跡では石核2・剥片を伴った集石遺構1基と剥片尖頭器1が出土している。札ノ元遺跡では1基の集石遺構を中心として径3m程度の範囲で石核2・ナイフ形石器1・剥片などが出土している。3遺跡とも姶良丹沢火山灰直上から旧石器が出土しており、札ノ元遺跡の焼石の熱ルミネッセン



第1図 丸野第2遺跡の位置及び周辺遺跡

- |            |            |            |              |            |
|------------|------------|------------|--------------|------------|
| 1. 芳ヶ迫第1遺跡 | 2. 芳ヶ迫第2遺跡 | 3. 芳ヶ迫第3遺跡 | 4. 札ノ元遺跡     |            |
| 5. 又五郎遺跡   | 6. 青木遺跡    | 7. 黒草遺跡    | 8. 高野原地下式横穴  |            |
| 9. ヒダカン城址  | 10. 片井野遺跡  | 11. 天建神社址  | 12. 桜町遺跡     | 13. 井倉洞穴遺跡 |
| 14. 梅谷城址   | 15. 船ヶ山遺跡  | 16. 灰ヶ野遺跡  | 17. 灰ヶ野地下式横穴 | 18. ズクノ山遺跡 |
| 19. 堀口B遺跡  | 20. 堀口A遺跡  | 21. 萩ヶ瀬遺跡  | 22. 田野城址     | 23. 丸野第2遺跡 |
| 24. 丸野遺跡   | 25. 前畠遺跡   | 26. 八重A遺跡  | 27. 八重B遺跡    |            |

ス法による年代測定法によれば 20,920 年 B.P. の年代が得られている。

縄文時代の早期の遺跡としては、貝殻条痕土器の前畠遺跡が知られていたが、芳ヶ迫第 1・3 遺跡、札ノ元遺跡、又五郎遺跡で発掘調査が行なわれている。その結果、芳ヶ迫第 1・3 遺跡で集石遺構 54 基、同第 3 遺跡で集石遺構 104 基、札ノ元遺跡で集石遺構 84 基・方形プランの堅穴住居 2 軒検出された。又五郎遺跡でも堅穴住居が検出されており、早期の堅穴住居としては県内に検出例がないので注目される。4 遺跡とも押型文土器が出土しているが、吉田・前平式土器は芳ヶ迫第 3 遺跡では全く出土していない。また手向山式・平椿式土器は札ノ元遺跡だけで、塞ノ神式土器は又五郎遺跡だけで出土している。以上のように遺跡間の距離が 180~300m と近距離でありながらそれぞれ土器群の様相を異にしている。石器の組成としては打製石器の割合が高く、特に芳ヶ迫第 1 遺跡からは磨製の環状石斧が出<sup>(4)</sup>土しており、発掘調査例としては小山尻東遺跡（清武町）に次いで 2 例目である。中期は県内全般的に非常に少なく、当地域においても少くない。後期になると、遺跡が急激に増え、後期初頭一中頃の指宿式・練式・下弓田式などが出土した青木遺跡では、配石造構や貯蔵穴が検出された。また黒草遺跡でも同時期の土器が出土している。

弥生時代の遺跡としては、黒草遺跡で終末期土器が出土しているだけであったが、今回の調査で後期の方形プランの住居跡が検出されたのは注目される。

古墳時代の円墳は確認されておらず、集落も調査されていない。しかし地下式横穴墓は灰ケ野<sup>(8)</sup>（1 基）と高野原<sup>(9)</sup>（2 基）が調査されており、3 基とも平入りのタイプで、他の 2 基が劍や刀子・鎌であるのに対して灰ケ野 1 号地下式横穴墓は蛇行剣・鉄斧などを出土している。

以上のように当地域は旧石器時代から縄文時代後期に多くの遺跡が存在すると併に、各時代各時期のうねりを受けながら独自の対応を行なっている。

## 註

- (1) 二宮忠司 「九州地方におけるナイフ形石器について」『考古学論叢』1 1973
- (2) 茂山 達・大野寅夫 「鬼湯郡下の旧石器」『宮崎考古』3号 1977
- (3) 面高哲郎・寺師雄二 「芳ヶ迫第 1~3 遺跡・札ノ元遺跡」『田野町文化財調査報告書』第 3 集 1986
- (4) 茂山 達 「宮崎郡田野町採集の貝殻条痕文土器」『宮崎考立』第 4 号 1978
- (5) 近藤 協 「小山尻東遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第 3 集 1985
- (6) 鈴木重治 「宮崎郡田野町青木遺跡の調査」『日本考古学協会第 28 回大会研究発表要旨』 1963
- (7) 岩永哲夫・北郷泰道 「黒草遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書』(3) 1979
- (8) 田中 茂 「宮崎郡田野町灰ケ野地下式横穴」『宮崎県総合博物館研究紀要』1 1972
- (9) 石川恒太郎 「田野町灰ケ野地下式古墳調査報告書」『宮崎県文化財調査報告書』第 17 集 1973
- (10) 田高正晴 「高野原地下式 1 号墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第 24 集 1981

## 第Ⅱ章 遺構と遺物

### 1. 調査区の設定と概要

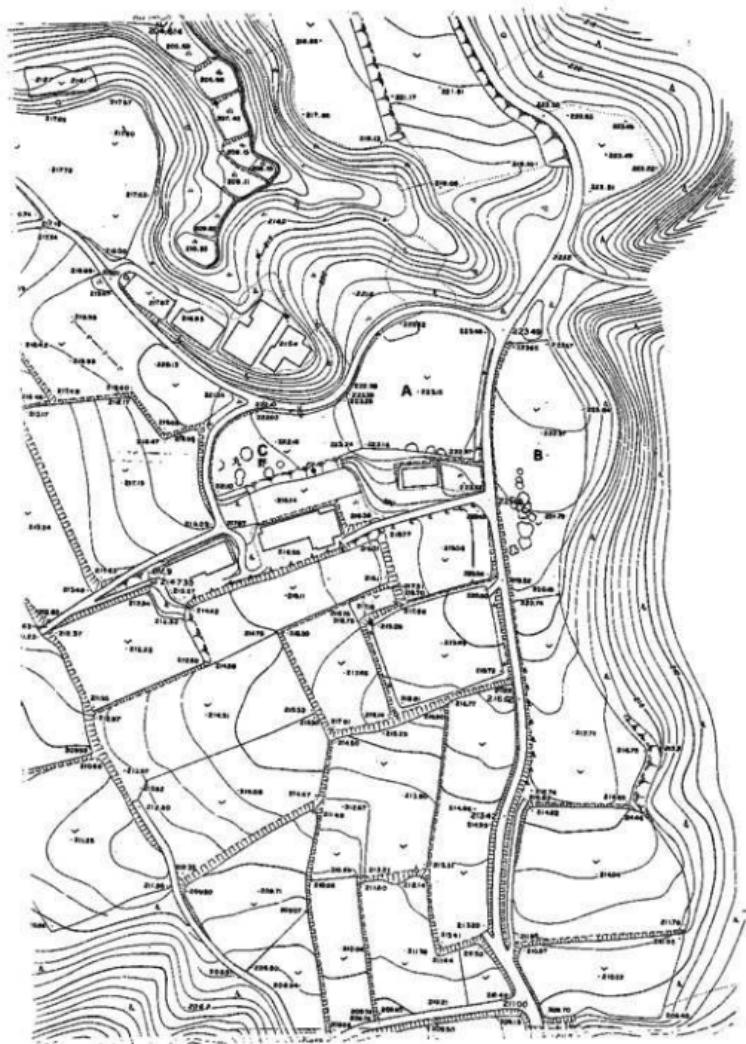
丸野第2遺跡（田野町赤松乙）は、宮崎市の南西約20kmにある田野盆地の北西部の南に伸びる標高120mの台地上に位置する（第2図）。当遺跡の北北西約1.5kmには周知の遺跡である丸野遺跡があり、縄文後・晩期の土器が出土している。

七野地区圃場整備事業に伴って昭和61年5月6日～9月30日まで5,600m<sup>2</sup>の発掘調査が田野町教育委員会によって行われた。南北方向に5m方眼のグリッドを設定し、調査した順番で東からB・A・C地区とした。縄文早期の土器としては、A地区で口縁部直下にヘラ様工具による押圧文を有する貝殻条痕文の土器が、B地区で山形押型文の土器が若干出土している。縄文後期前半の竪穴式住居が、A地区で4軒、B地区で15軒、C地区で7軒検出された。また、A地区的北端部の土器溜りから同時期の土器がかなりの量出土し、南東部ではピット群と土壙群が検出された。縄文後期前半の土器群としては指宿式・松山式・市来式・小池原上層式・鐘ヶ崎式などが出土し、石器としては磨製石斧・切目石錐・打製石鎌・輕石製浮子・石刀などが出土している。

### 2. 包含層の状態

当遺跡では、アカホヤ層はA地区の南端部、B地区の南半分、C地区の南半分で残存していた。

当遺跡の基本層序は、I層が暗褐色土層（Hue 7.5 YR 3/4・耕作土・粘性が弱い）、II層が黒褐土層（7.5 YR 2/2・I層より粘性があり固くしまっている。）、III層が黄褐色土層（10 YR 5/6・アカホヤ層）、IV層が褐色土層（7.5 YR 4/3・粘性が強く、1～3cmの小礫をわずかに含む）、V層が黄褐色土層（10 YR 5/8・粘性は中程度、3～5cmの細礫を多量に含む）、VI層が暗褐色土層（10 YR 6/6・粘性が強く、数mmの細砂粒を多く含む）である（第3図）。縄文後期の土器包含層はII層である。



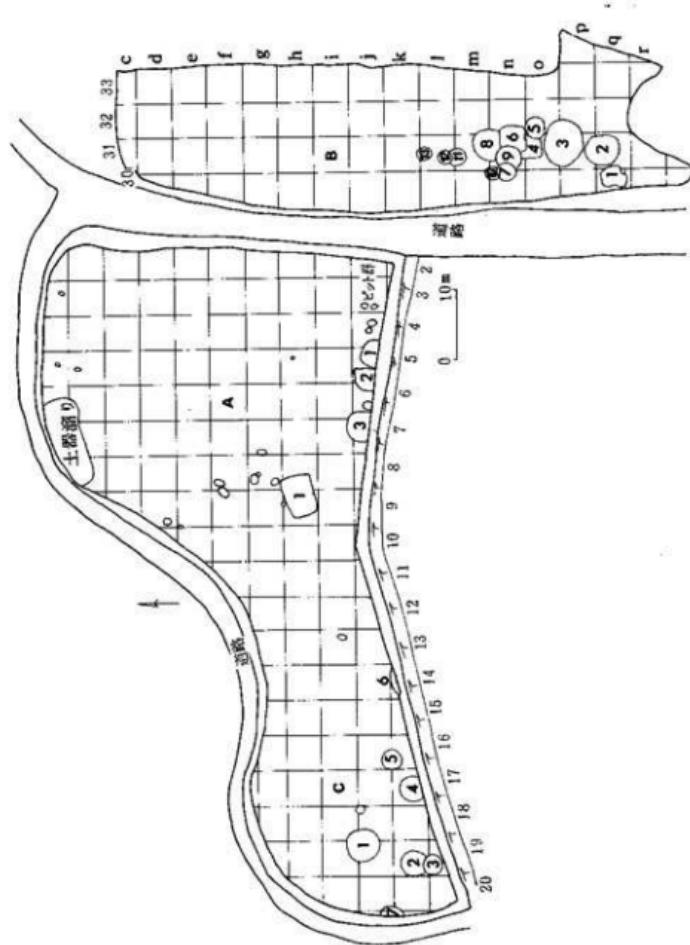
第2図 周辺地形図 ( $S = 1/2000$ )



第3図 A地区西壁土層断面図

- I 黒褐色土層 (7.5 YR  $\frac{3}{4}$ )、礫混入 (7.5 YR  $\frac{7}{8}$ ) のハシスを多く含み粘性は弱くカカシしている。  
耕作土
- II 黒褐色土層 (7.5 YR  $\frac{2}{2}$ )、1層より粘性があり固くしまっている。ハシスを僅かに含み、3～5mmの小礫も含む。また、土器も包含している。  
炭化物を僅かに含む。
- III 黄褐色土層 (10 YR  $\frac{5}{6}$ )、黄褐色 (7.5 YR  $\frac{7}{8}$ ) のハシスを多量に含む。アカホヤ層に比定される。  
粘性弱く、乾燥すると脆くくずれる。
- IV 棕褐色土層 (7.5 YR  $\frac{4}{3}$ )、粘性強く、乾燥すると固くしまる。1～3cm程度の小礫を僅かに含む。土器は包含せず。  
V 黄褐色土層 (10 YR  $\frac{5}{8}$ )、粘性は中程度、3～5mmの細礫を多量に含む。N層よりしまりが遅い。土器は包含せず。手ざわりがザザタしている。
- VI 明黃褐色土層 (10 YR  $\frac{6}{6}$ )、粘性強く、メリカがある。数mmの細砂粒を多く含む。土器は包含せず。
- a 明褐色土層 (7.5 YR  $\frac{5}{6}$ )、粘性強く固くしまる。1～3cmの小礫を含み白色粒子が多い。  
黄褐色のソロックを僅かに含み細粒を多く含む。
- 後期土器を包含する。炭化物も僅かに含む。
- b に近い黄褐色土層 (10 YR  $\frac{5}{3}$ )、黄褐色の細粒を僅かに含むがソロックは含まない。  
粘性強いが乾燥すると脆い。土器は出土せす。
- c 棕色土層 (10 YR  $\frac{4}{1}$ )、粘性は中程度で固くしまる。  
黄褐色のソロック及び細粒を多く含む。3～5mmの細礫も多い。
- 後期の土器が出土。

第4図 遺構分布図



### 3. 縄文時代早期の遺構と遺物

アカホヤ層まで削平されたA地区の北側で縄文早期の土器、B地区北側で山形押型文土器が出土した。遺構としてはC地区i-13で集石遺構が1基検出された。アカホヤ層が残存していたA-C地区的南側は、作付作物の関係で早期の包含層の調査は残念ながら断念せざるを得なかった。

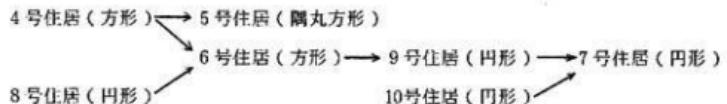
A地区では口縁部の外側にヘラ状施文具で2段に押圧或いは刺突し、その下位に貝殻条痕文を施した前平式土器が、B地区では山形押型文土器が出土している(第5図)。

### 4. 縄文時代後期の遺構と遺物

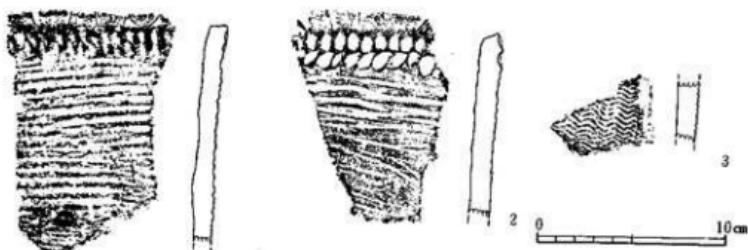
後期前半の遺構はA-C地区の南側に竪穴住居がA地区で4軒、B地区で15軒、C地区で7軒計26軒検出され、特にB地区では方形プランと円形プランが切り合っているのは注目される。A地区的北端部のa-b-6-8の土器通りから同時期の土器が多量に出土し、南東部ではピット群と土塙群が検出された(第4図)。縄文後期前半の土器群としては指宿式・松山式・市来式・小池原上層式・鐘ヶ崎式などが出土し、石器としては磨製石斧・切日石鎌・打製石鏃・輕石製浮子・石刀などが出土している。

#### (1) 竪穴住居

竪穴住居は、A地区的j-4-7に半分割られて4軒、B地区的l-q-30-32に15軒、C地区的i-l-14-21に7軒分布しており、南部は削られているが、3グループに分かれ、ドーナツ状に分布していた可能性もある。C地区がすべて円形プランであるのに対してB地区は方形プランと円形プランが混在しており、竪穴住居は切り合い関係から次のようになる(第6図)。



方形・円形プランの混在から円形プランへの変遷がたどれる。以下、詳細については竪穴住居観察表(第1表)を参照されたい。



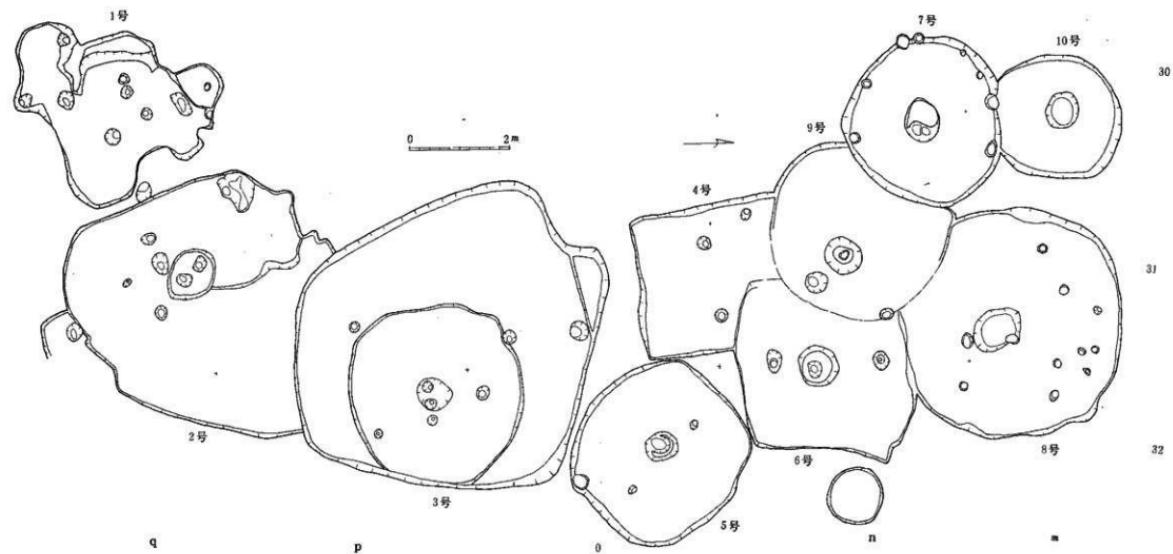
第5図 縄文早期土器実測図

地区	住居	プラン	規 模 cm	柱穴	燒土	備 考
A 地 区	1号住居	円 形	420×215+α	9		2軒の切り合い
	2号住居	隅丸方形	320×250+α	5		上塙1
	3号住居	円 形	400×300+α	3	○	
B 地 区	1号住居	不 定 形	390×360	9		住居としては疑問
	2号住居	方 形	520×500	6		方形住居2軒の切り合い
	3号住居	方 形	600×580	8		方形住居2と円形住居1の切り合い
	4号住居	方 形	300+α×280	3		
	5号住居	隅丸方形	340×330	3		
	6号住居	方 形	340×340	3		
	7号住居	円 形	330×320	9		
	8号住居	円 形	550×420	1		
	9号住居	円 形	360×360	2		
	10号住居	円 形	250×250	1		
C 地 区	11号住居					
	12号住居					
	13号住居					
	1号住居	円 形	480×460	17	○	*
	2号住居	円 形	360×340	10		
	3号住居	円 形	280×250	5		
	4号住居	円 形	360×250+α	2		
	5号住居	円 形	310×210+α	2		
	6号住居	円 形	400+α×100+α			
	7号住居	円 形	340×140+α			

第1表 壁穴住居観察表

第2表 織文早期土器断縫表

図 番 号	器種	形	外 面		内 面		色		内 部	施 工	口 径	底 高	備 考
			外 部	内 部	外 部	内 部	色	施 工					
1 b-7	棒錐	2倍にへたりて 削窓	ナメ	山形底・コロナフ 貝殻底	ナメ	山形底・コロナフ 貝殻底	7.5VR 6/4	7.5VR 6/4	にぶい黒 7.5VR 6/4	1~2mmの反覆の良 好な火候。火候の良 好	6/4	6/4	
2 1-5	棒錐	2倍にへたりて 押正	ナメ	口筒底・コロナフ 輪刃の痕跡有	ナメ	口筒底・コロナフ 輪刃の痕跡有	7.5VR 6/4	7.5VR 6/4	にぶい黒 7.5VR 6/4	1~2mmの白湯。民 衆の皆を多く含む	6/4	6/4	
3 1-32	棒錐	削 底	山形押形文 ナメ	山形押形文 ナメ	山形押形文 ナメ	山形押形文 ナメ	10VR 7/4	10VR 7/4	にぶい黒 10VR 7/4	山形の良、白湯の良 好	6/3	6/3	



第6図 B地区造構分布図

### (2) 繩文土器

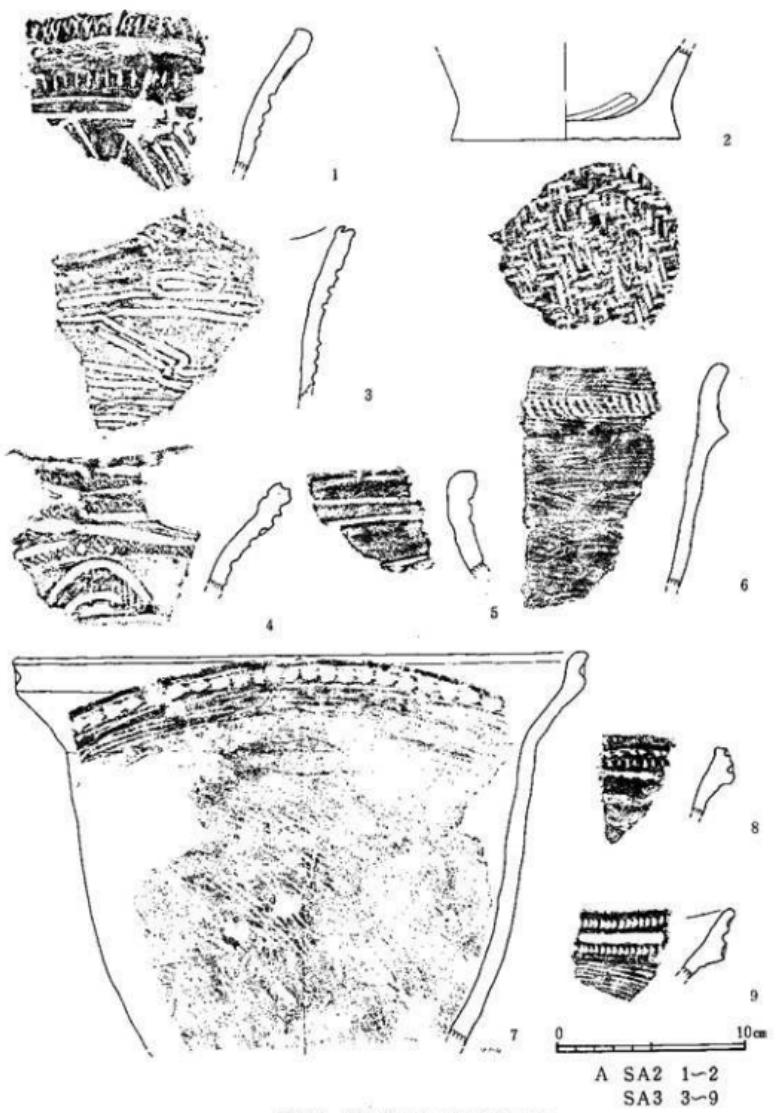
当遺跡から出土した土器量は非常に多いので、今回はA地区の2・3号住居、B地区の2～9号住居、C地区的1号住居及び、各グリッドの特徴的な土器を図示するにとどめる（第7～19図）。指宿式（16・18など）、松山式（71・85）、市来式（10・41・76など）、草野式（45・46）、小池原上層式（4・88）、篠ヶ崎式（96）などが出土しているが、形態分類及び詳細については本報告で行ないたい。

### (3) 石器

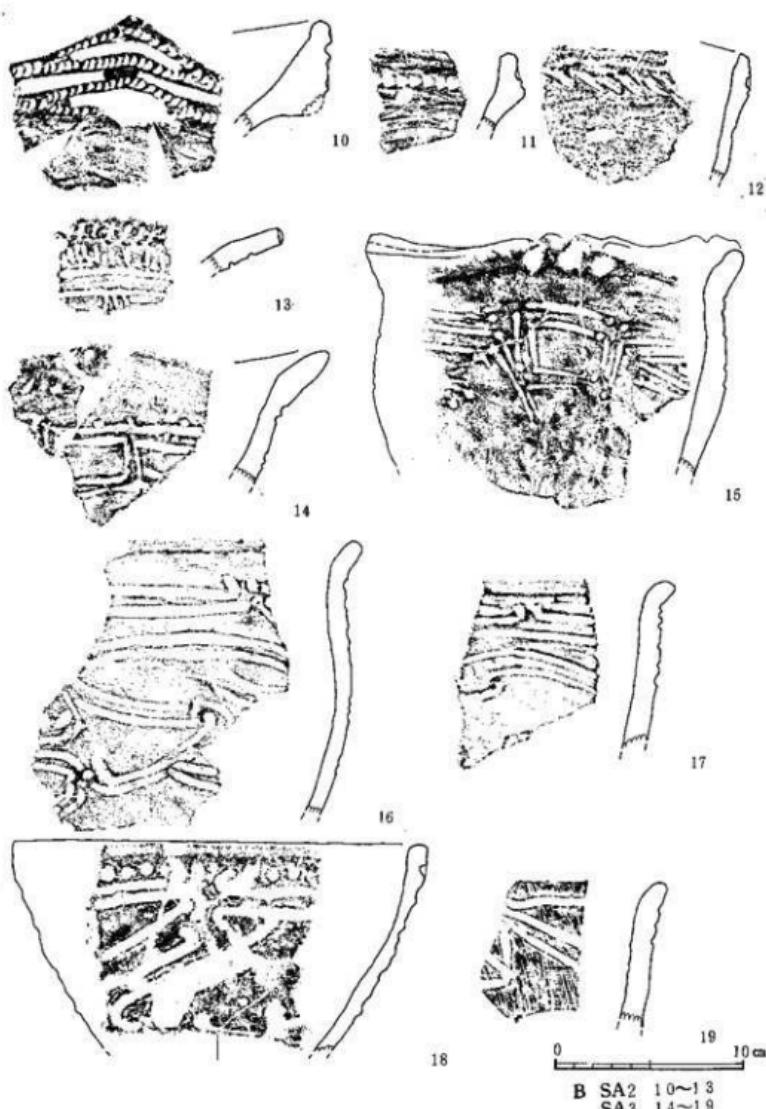
石器組成の特徴としては、石斧はすべて磨製石斧であり扁平打製石斧は全く出土していない点、石皿と磨石の量が多い点、石錐は切目石錐と両端打欠きの河原石石錐が半々であるが少量である点などである。注目されるのはℓ-32出土の石刀であり、2条平行沈線と格子目文を施しており、粘板岩製である（第20図）。

## 5. 弥生時代の遺構と遺物

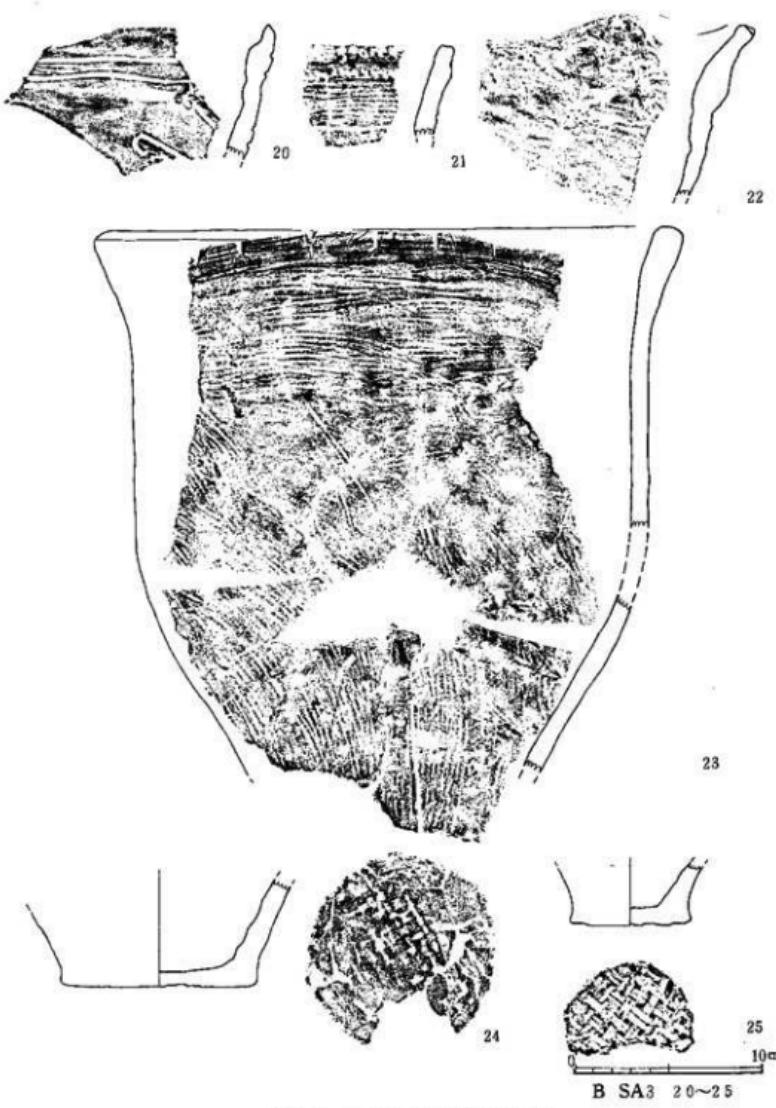
弥生時代の遺構としてはh-8・9の方形プランの竪穴住居1軒のみである。住居は57.0m×41.0mの規模で、無窓磨製石錐や木製品・剥片が多数出土しており、後期前半の土器が少量出土した。



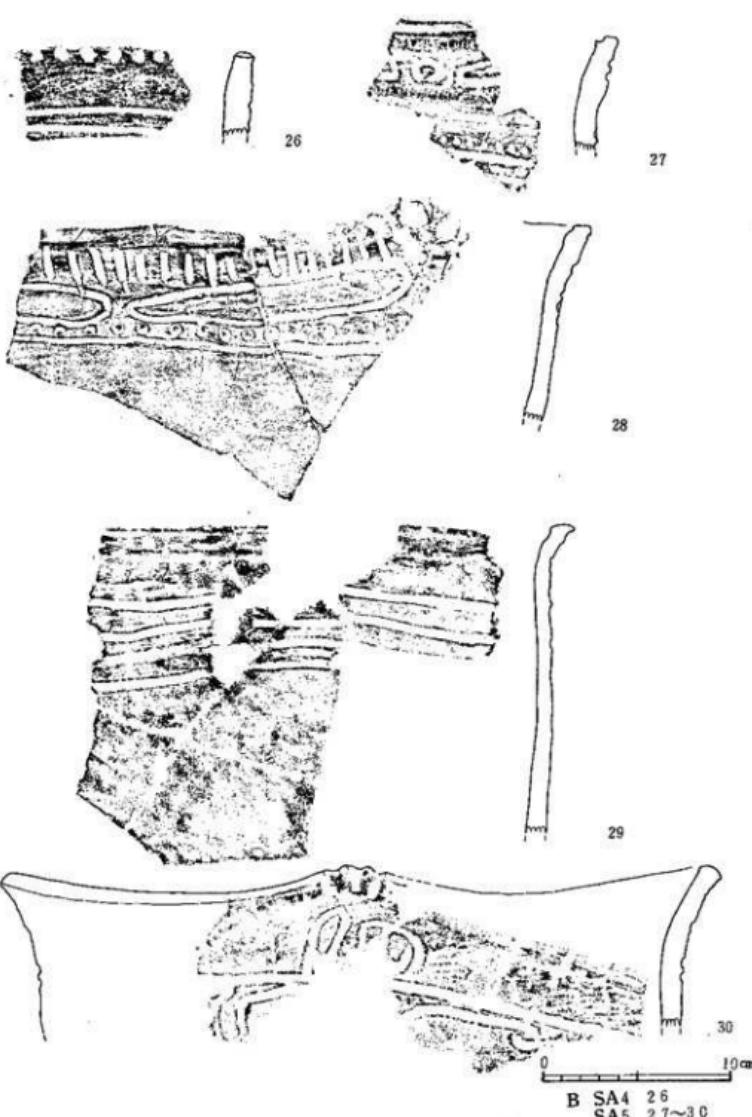
第7図 繩文後期土器実測図(Ⅰ)



第8図 繩文後期上器実測図 (II)



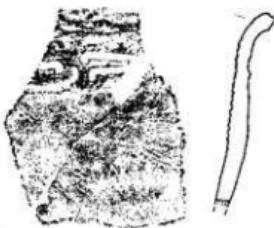
第9図 繩文土器土器実測図(III)



第10図 縄文後期土器実測図(IV)



31



32



33



34



35



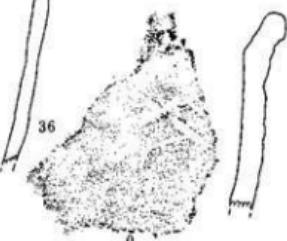
37



36



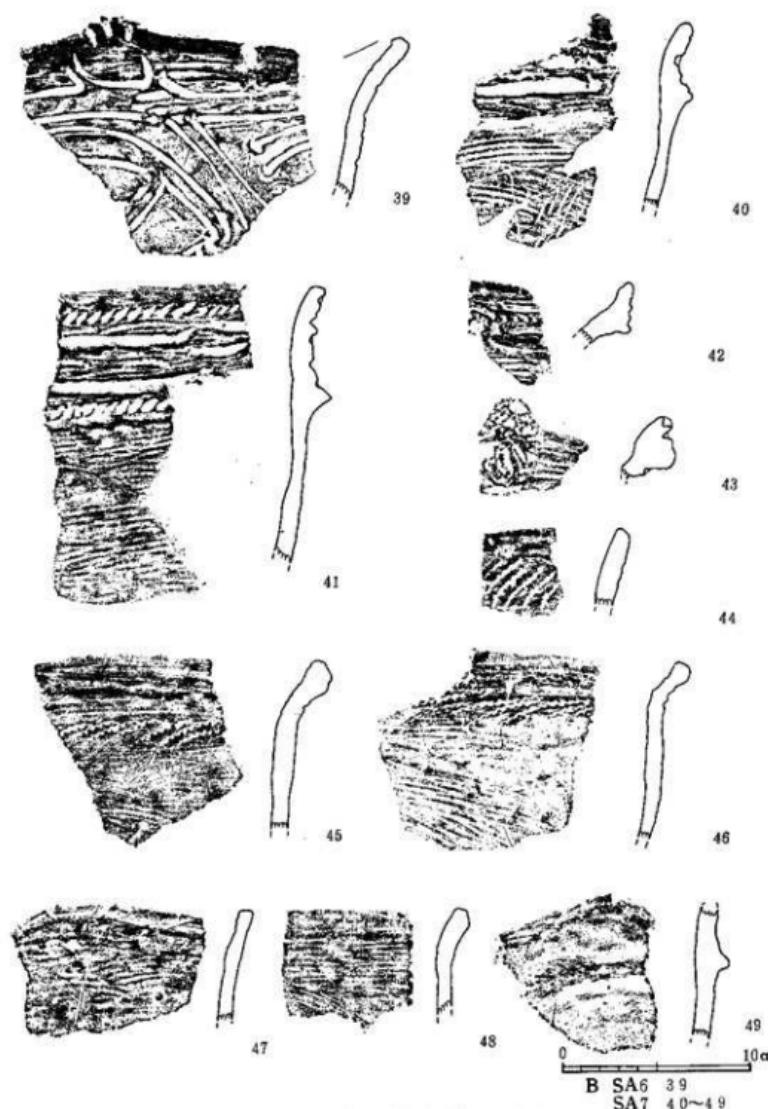
37



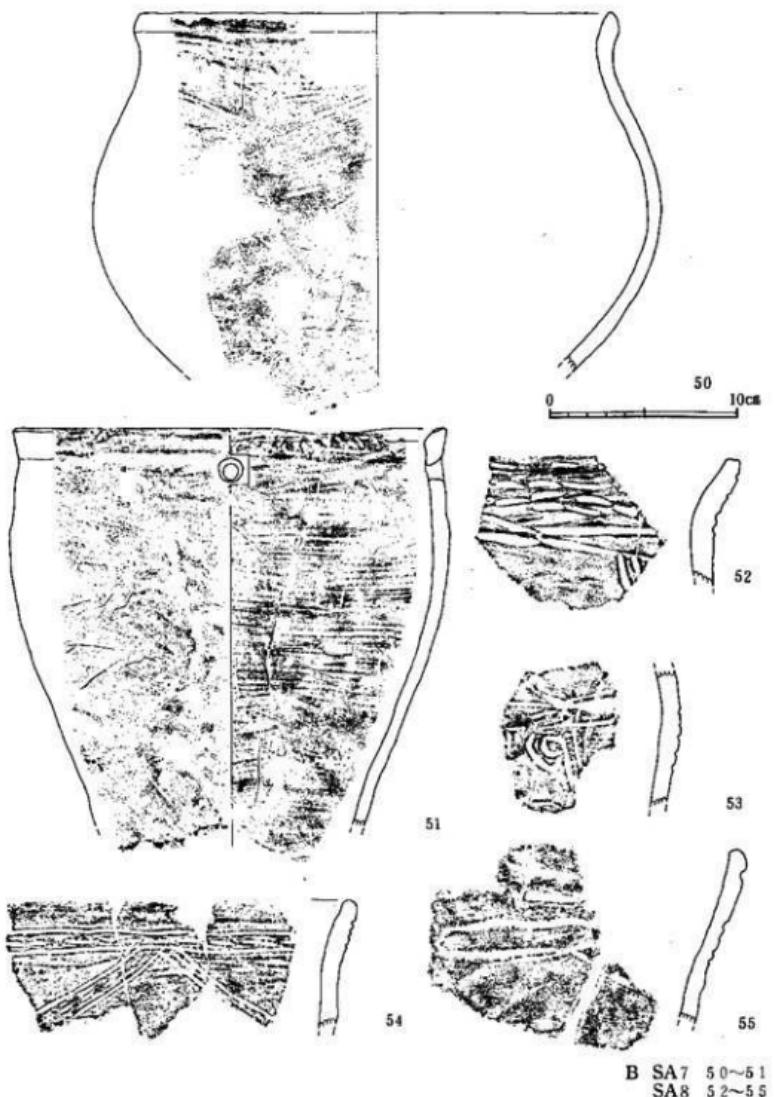
38

B SA5 31~38

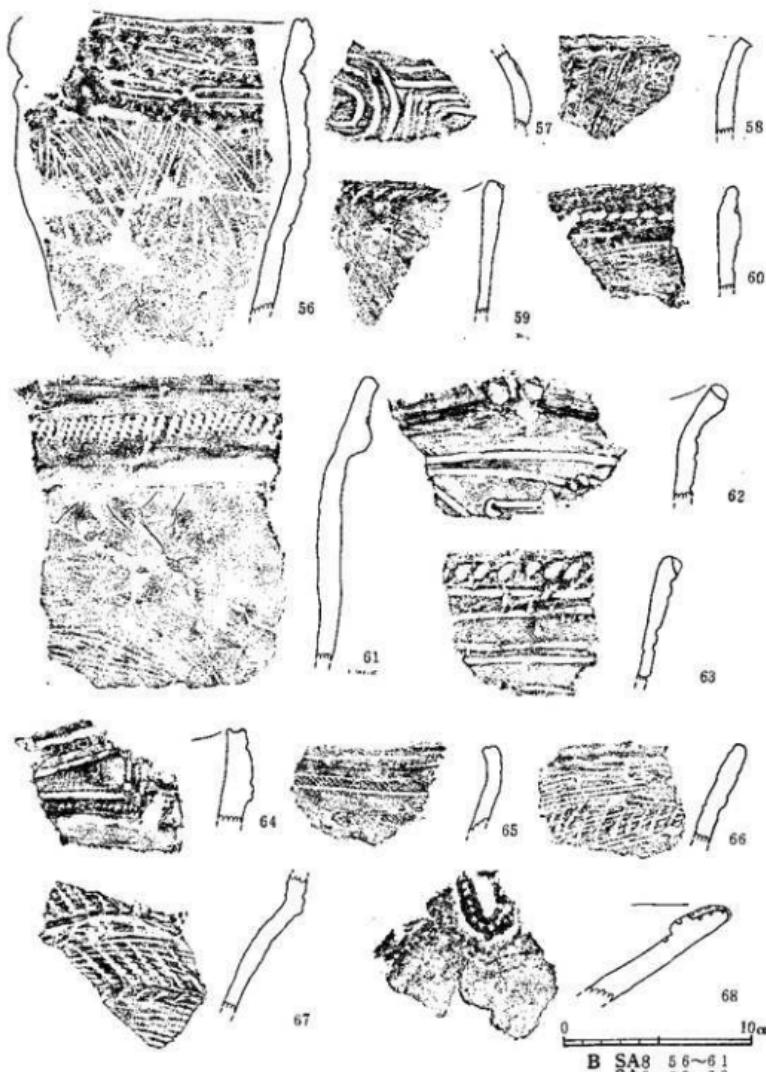
第11図 繩文後期土器実測図(V)



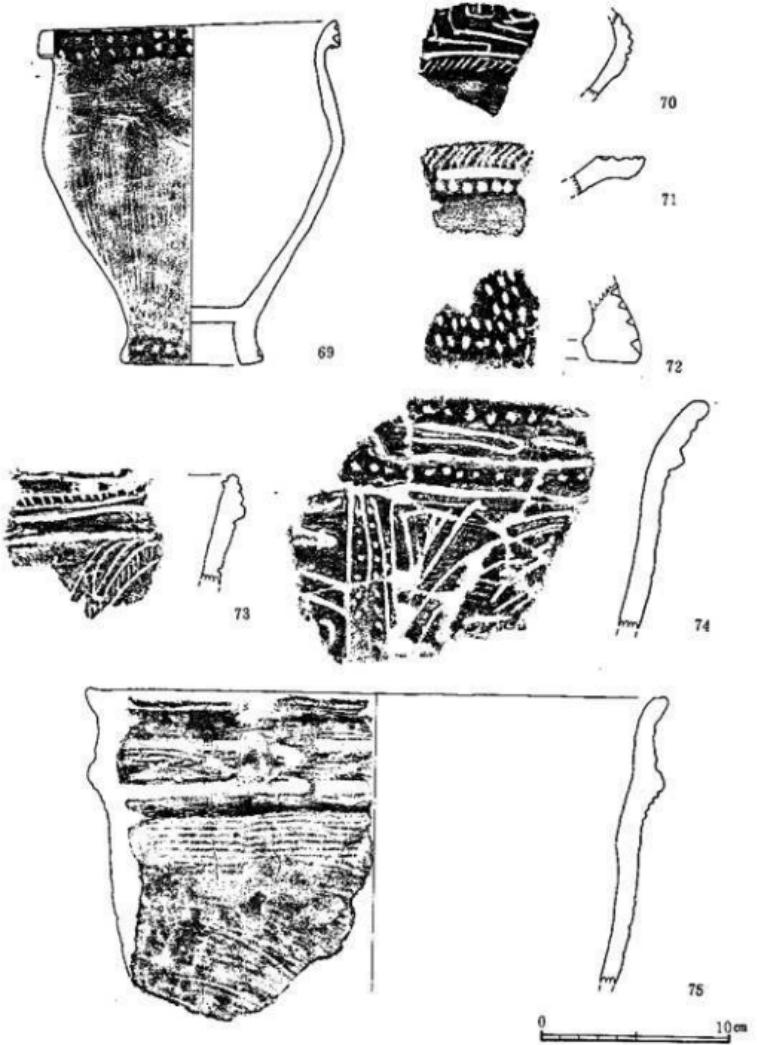
第12図 繩文後期土器実測図(VI)



第13図 細文後期土器実測図 (VII)



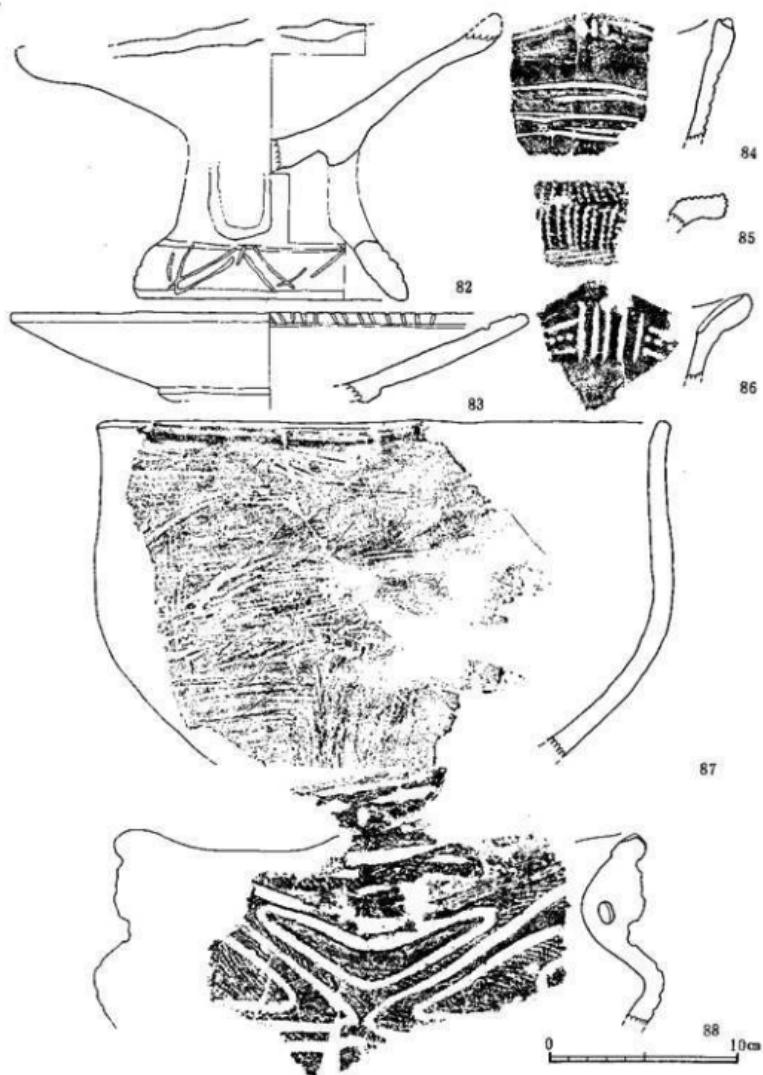
第14図 縄文後期土器実測図 (VII)



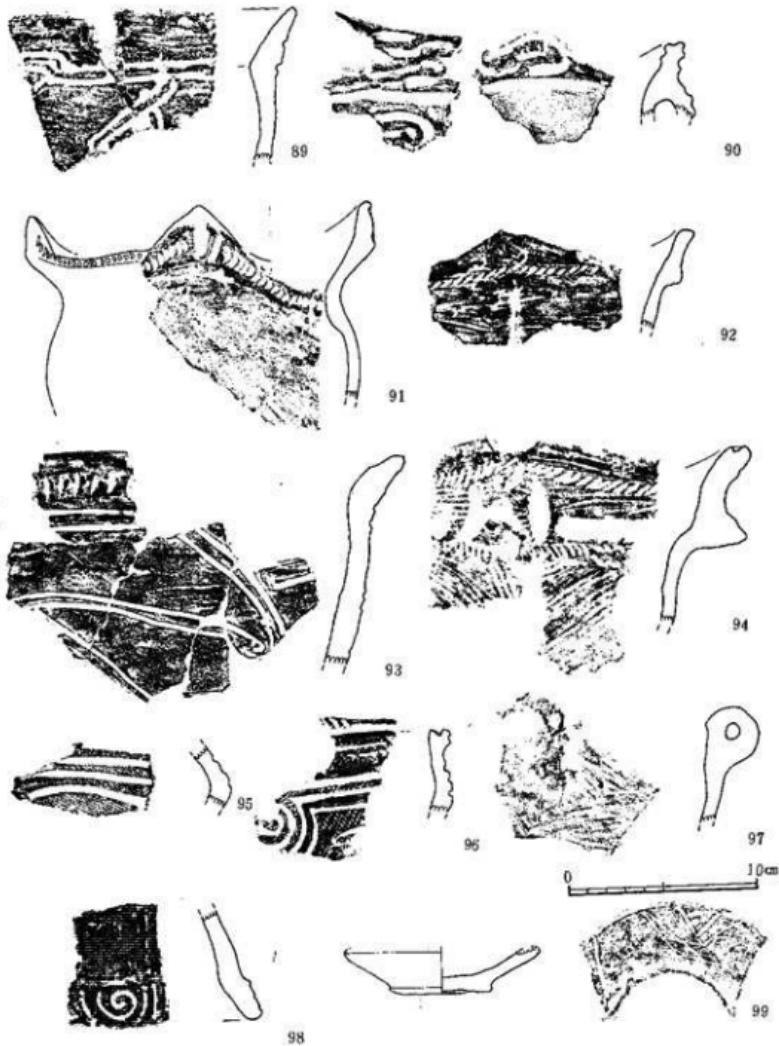
第15図 縄文後期土器実測図(IX)



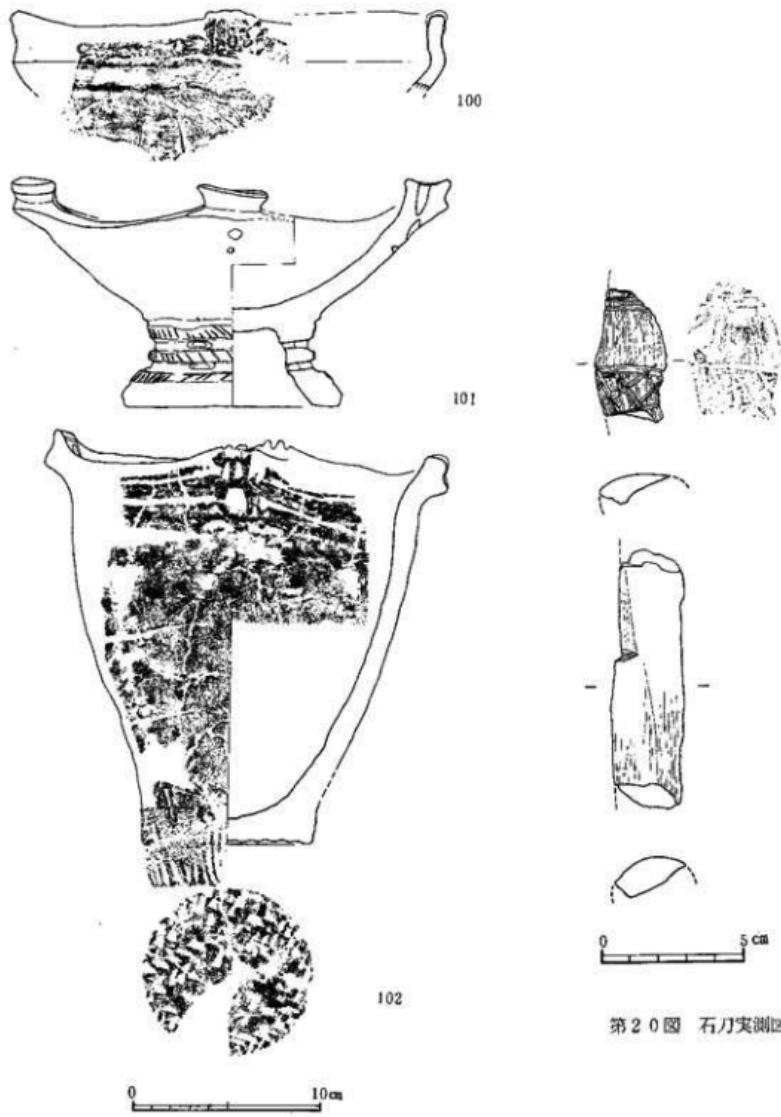
第16図 繩文後期土器実測図(X)



第17図 繩文後期土器実測図 (XII)



第18図 繩文後期土器実測図 (XII)



第20図 石刀実測図

第19図 繩文後期土器実測図 (3)

図 番 号	名 称	部 位	外 文	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面
1 A	原体	口縁部 ヘラ形切欠文 櫛目留痕文		ナメラナメ	ココナメ													
2 A	SA2 原体	長、短			ナメ	ナメ	新端面	にぶい塗	5YR 3/1	5YR 5/6	5YR 5/6	5YR 3/1	5YR 3/1	5YR 5/6	5YR 3/1	5YR 5/6	5YR 5/6	
3 A	SA3 原体	口縁部	頭尾に筋ひ 櫛目留痕文															
4 A	SA3 原体	口縁部 横内縫文					横方向の肉厚縮痕		5YR 7/3	7.5YR 7/3	5YR 7/3							
5 A	SA3 原体	口縁部 3条凹縫					ヘタツテ	10YR	6/3	にぶい塗	10YR	6/3	にぶい塗	10YR	6/3	にぶい塗	10YR	6/3
6 A	SA3 原体	口縁部 ヘラ割突文			ナメ	ココナメ				5YR 4/2	5YR 5/4	5YR 5/4	5YR 4/2	5YR 5/4	5YR 5/4	5YR 4/2	5YR 5/4	5YR 5/4
7 A	SA3 原体	口縁部 ヘラ形切欠文			朱板		明赤面		5YR 6/6	5YR 6/6	5YR 6/6							
8 A	SA3 原体	口縁部 横内縫文			ナメ		新端面	にぶい塗	5YR 6/8	5YR 6/8	5YR 6/8							
9 A	SA3 原体	口縁部 2条内縫文			ナメ		横方向の肉厚縮痕 横方向の肉厚縮痕	10YR	6/6	朱板	10YR	6/6	朱板	10YR	6/6	朱板	10YR	6/6
10 B	原体	口縁部 3条凹縫			朱板		明赤面		5YR 6/6	5YR 6/6	5YR 6/6							
11 B	SA2 原体	口縁部 横内縫文			ココナメ	ココナメ			5YR 5/3	5YR 5/3	5YR 5/3							
12 B	SA2 原体	口縁部	新方向の肉厚文															
13 B	SA2 原体	口縁部 2条凹縫			ココナメ	ココナメ												
14 B	SA3 原体	口縁部 横内縫文			ナメ	ココナメ												
15 B	SA3 原体	口縁部 ~斜面			ナメ	ココナメ												
16 B	SA3 原体	口縁部 2条凹縫	2条凹縫 櫛目留痕文 横内縫文		ココナメ・ココナメ	ココナメ・ココナメ	新端面 横内縫文	にぶい塗	5YR 4/3	5YR 4/4	5YR 4/4	5YR 5/5	5YR 5/5	5YR 5/5	5YR 5/5	5YR 5/5	5YR 5/5	
17 B	SA3 原体	口縁部 2条凹縫	櫛目留痕文 横内縫文		ココナメ	ココナメ	新端面 横内縫文	にぶい塗	5YR 4/3	5YR 4/3	5YR 4/3	5YR 3/2	5YR 3/2	5YR 3/2	5YR 3/2	5YR 3/2	5YR 3/2	
18 B	SA3 原体	口縁部 2条凹縫	櫛目留痕文 横内縫文		ナメ	ナメ	明赤面	にぶい塗	5YR 7/3	10YR	7/3	5YR 5/6	5YR 5/6	5YR 5/6	5YR 5/6	5YR 5/6	5YR 5/6	
19 B	SA3 原体	口縁部 2条凹縫	櫛目留痕文 横内縫文		赤糸文	ナメ	新端面	にぶい塗	5YR 5/6	5YR 5/6	5YR 5/6							
20 B	SA3 原体	口縁部 2条凹縫	櫛目留痕文 横内縫文		ナメ	ナメ	新端面	にぶい塗	5YR 5/4	5YR 5/4	5YR 5/4							
21 B	SA3 原体	口縁部 2条凹縫	櫛目留痕文 横内縫文		ナメ	ナメ	新端面	にぶい塗	5YR 5/8	5YR 5/8	5YR 5/8							
22 B	SA3 原体	口縁部 2条凹縫	2条凹縫 新端面		ナメ	ナメ	新端面	にぶい塗	5YR 4/4	5YR 4/4	5YR 4/4	5YR 3/2	5YR 3/2	5YR 3/2	5YR 3/2	5YR 3/2	5YR 3/2	

細口(前後)の跡  
を多く含む

灰褐色、白、黒色  
の3色  
が混在する  
直線状

外側部(里側)  
内側部(里側)  
内側部(里側)

内側部(里側)  
外側部(里側)

外側部(里側)  
内側部(里側)



品種名	原産地	栽培地	栽培方法	特徴	収量	生长期	用途
4-5 U SA1-17番	日本	日本	日耕作	日耕作植物学文 日本農業研究会 編著『日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ』	無病害 3/3	にぶい霜 7.5YR 5/4	栽培合意 良好
4-7 H SA1-17番	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	にぶい霜 7.5YR 5/4	白・半透明の透明 色を含む	栽培合意 良好
4-8 H SA1-17番	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好
4-9 H 有病	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好
5-0 H SA1-17番	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好
5-1 B SA1-17番	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好
5-2 B SA8-原種	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好
5-3 B SA8-原種	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好
5-4 H SA2-原種	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好
5-5 H SA2-原種	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好
5-6 B SA9-原種	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好
5-7 H SA1-17番	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好
5-8 B SA1-17番	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好
5-9 B SA3-原種	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好
6-0 B SA8-原種	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好
6-1 B SA8-原種	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好
6-2 B SA9-原種	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好
6-3 B SA1-17番	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好
6-4 C SA1-17番	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好
6-5 C SA1-17番	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好
6-6 C SA1-17番	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好
6-7 C SA1-17番	日本	日本	口耕作	日本農業研究会 栽培植物の名とナメ カ	無病害 5/5	0.2~1.1 5YR 6/6	栽培合意 良好

C.S.	S.A.	脚注	所定義	見当形	所定義	見当形	ナデ																
6.8	A SA.3	脚註	所定義	見當形	所定義	見當形																	
6.9	A SA.3	脚註	所定義	見當形	所定義	見當形																	
7.0	a-7	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
7.1	a-7	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
7.2	a-7	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
7.3	a-7	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
7.4	b-6	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
7.5	b-6	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
7.6	b-6	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
7.7	b-8	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
7.8	c-6	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
7.9	c-8	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
8.0	f-6	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
8.1	b-6	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
8.2	b-4	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
8.3	b-4	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
8.4	i-6	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
8.5	i-6	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
8.6	i-7	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
8.7	i-8	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
8.8	j-8	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
8.9	j-2	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	
9.0	j-4	脚註	脚註	脚註	脚註	脚註																	

91	J-4	西経 口経部 ~幹部 脚交叉	新安文	口外底（ナダ） 脚力向のナダ	左脚掌、右脚掌、脚掌 ヨコナダ	2.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	良好
92	J-7	東経 口経部 脚交叉		ナダ	脚力向の脚掌底部 ヨコナダ	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	良好
93	J-7	作経 口経部 脚交叉文	新安文 脚交叉文	ナダ 員脚交叉	員脚交叉ナダ	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	良好
94	J-7	東経 口経部 脚交叉文	新安文 脚交叉文	ナダ 員脚交叉	員脚交叉ナダ	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	良好
95	H-33	佐林 新 脚 脚交叉文	新安文 脚交叉文	ナダ 員脚交叉	員脚交叉ナダ	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	良好
96	J-30	作経 口経部 脚交叉文	新安文 脚交叉文	ナダ 員脚交叉	員脚交叉の状 ナダ 員脚交叉	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	良好
97	I-31	便経 脚 脚交叉文	新安文 脚交叉文	ナダ 員脚交叉	員脚交叉ナダ	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	良好
98	I-31	新経 脚 脚交叉文	新安文 脚交叉文	ナダ 員脚交叉	員脚交叉ナダ	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	良好
99	H-31	三 口経部 ~長部		ナダ	K-5.5YR 5/6 6/4	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	良好
100	H-30	便経 脚 脚交叉文		ナダ ヨコナダ	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	良好
101	—	脚 脚交叉に交換と四 脚		ヨコナダ ナダ	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	良好
102	—	便経 脚交叉に交換 脚		ヨコナダ ナダ	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	5.5YR 5/6 7.5YR 6/6	良好

### 第三章 まとめ

丸野第2遺跡は縄文早期・後期と弥生時代後期の遺跡であるが、最盛期の後期前半には堅穴住居が計26軒宮まれている。しかし、後期後半～晩期と弥生前・中期には集落の形成が断絶しており、集落の移動が考えられる。

早期の土器群は、A地区の前平式土器とB地区の山形押型文であるが、アカホヤ下唇を発掘調査していないので、分布及び詳細について不明であり、前平遺跡群との比較はできなかったのが惜しまれる。<sup>(1)</sup>

後期前半の土器群は、指宿式・松山式・市来式・草野式などの南九州の土器群と小池原上層式・鐘ヶ崎式などの東九州・西九州の土器群で構成されている。特に指宿式・市来式の時期にピークがある。

石器としては、打製石鎌・磨製石斧・切目石錐・繊石製浮子・磨石・石皿などが出土している。特に県北の陣内遺跡（高千穂町）で多数出土する扁平打製石斧は全く出土していないことは、県北と県南及び山間部と平野部の生活基盤の様相の違いを示している。また石錐で切目石錐の割合が高いことは既に指摘されているように河川域の漁撈に関係するとと思われる。<sup>(2)</sup> 第2の道具の刀剣形石製品は、県内でも陣内遺跡で石棒が1点、天附型石刀が陣内遺跡・西都原市周辺2例・平畠遺跡（宮崎市）の計4例知られているだけであるが、数条の沈線と斜格子文を施した櫛原型（a類）石刀の出土は、県内及び九州でも初例であるので注目される。<sup>(3)</sup>

堅穴住居が、A地区で4軒、B地区で15軒、C地区で7軒の計26軒検出されたのは、県内では平畠遺跡の6.6軒に次ぐ規模であり、後期前半の住居としては平畠遺跡（11軒）と下弓出遺跡（牛窓市・3軒）が発掘されただけである。特にB地区では堅穴住居の切り合いから方形プランから円形プランへの変遷が追えると共に、岩崎上層式から草野式までの土器編年と対比することが可能となった。B地区ではⅠ期（岩崎上層式段階）のⅠa期が4号住、Ⅰb期が5・8号住、Ⅱ期（指宿式段階）のⅡa期が6号住、Ⅱb期が9号住、Ⅲ期（市来式段階）のⅢa期が10号住、Ⅲb期が7号住、Ⅳ期（草野式段階）の7号住となる。A地区はⅡ～Ⅲ期、C地区はⅢ～Ⅳ期、A地区的土器溜りはⅡ～Ⅲ期である。<sup>(4)</sup>

弥生後期の住居からは磨製石鎌の未製品や剥片が出土しており、石器製作の場として使用されている。

以上のように、当遺跡は縄文後期前半の集落として住居の変遷及び土器編年が追求できるので、細かい土器編年・石器組成・集落構造などの問題点は本報告書の中で明らかにしていきたいと思う。

註

- (1) 面高哲郎・寺師雄二 「芳ヶ迫第1・2・3遺跡 札ノ元遺跡」 『田野町文化財調査報告書』第3集 1986
- (2) 鈴木重治・賀川光夫 「陣内遺跡」 『日向遺跡総合調査報告』第2輯 1962
- (3) 坂元嘉弘 「内陸部の縄文後期遺跡」 『大分県史 先史編Ⅰ』 1983
- (4) 後藤信祐 「縄文後晩期の刀劍形石製品の研究(上)」 『考古学研究』第33卷第3号 1986
- (5) 註(4)と同じ
- (6) 小田富士雄 「宮崎県西部原附近発見の石刀」 『九州考古学』第15卷第7号 1962
- (7) 北郷泰道・菅付和樹・日高季治 「平畠遺跡」 『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 1985
- (8) 註(5)と同じ
- (9) 昭和60年に宮崎大学が調査を行なっているが、未報告。
- (10) 石川恒太郎他 「下弓田遺跡」 『日向遺跡総合調査報告書』第1輯 1961

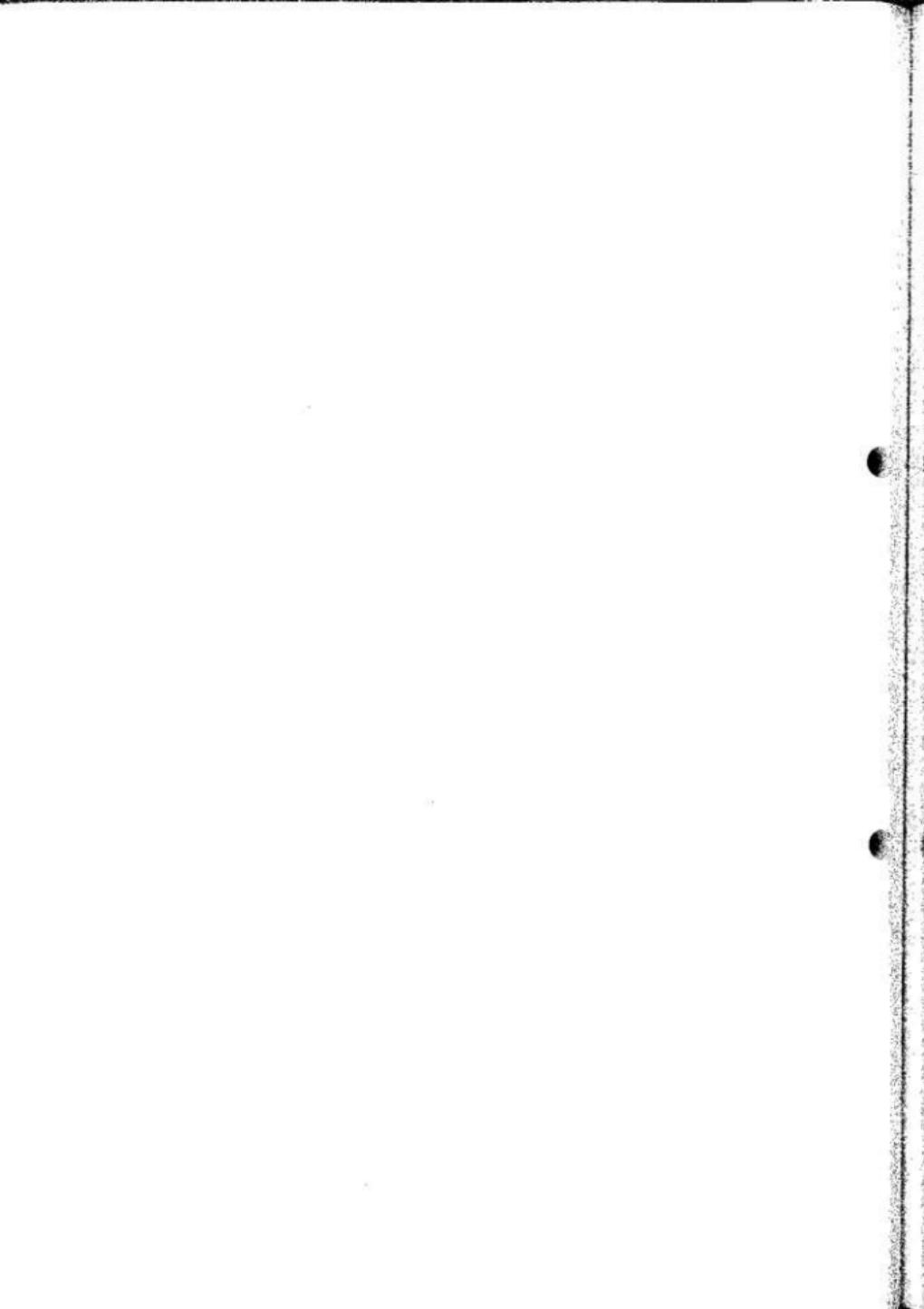
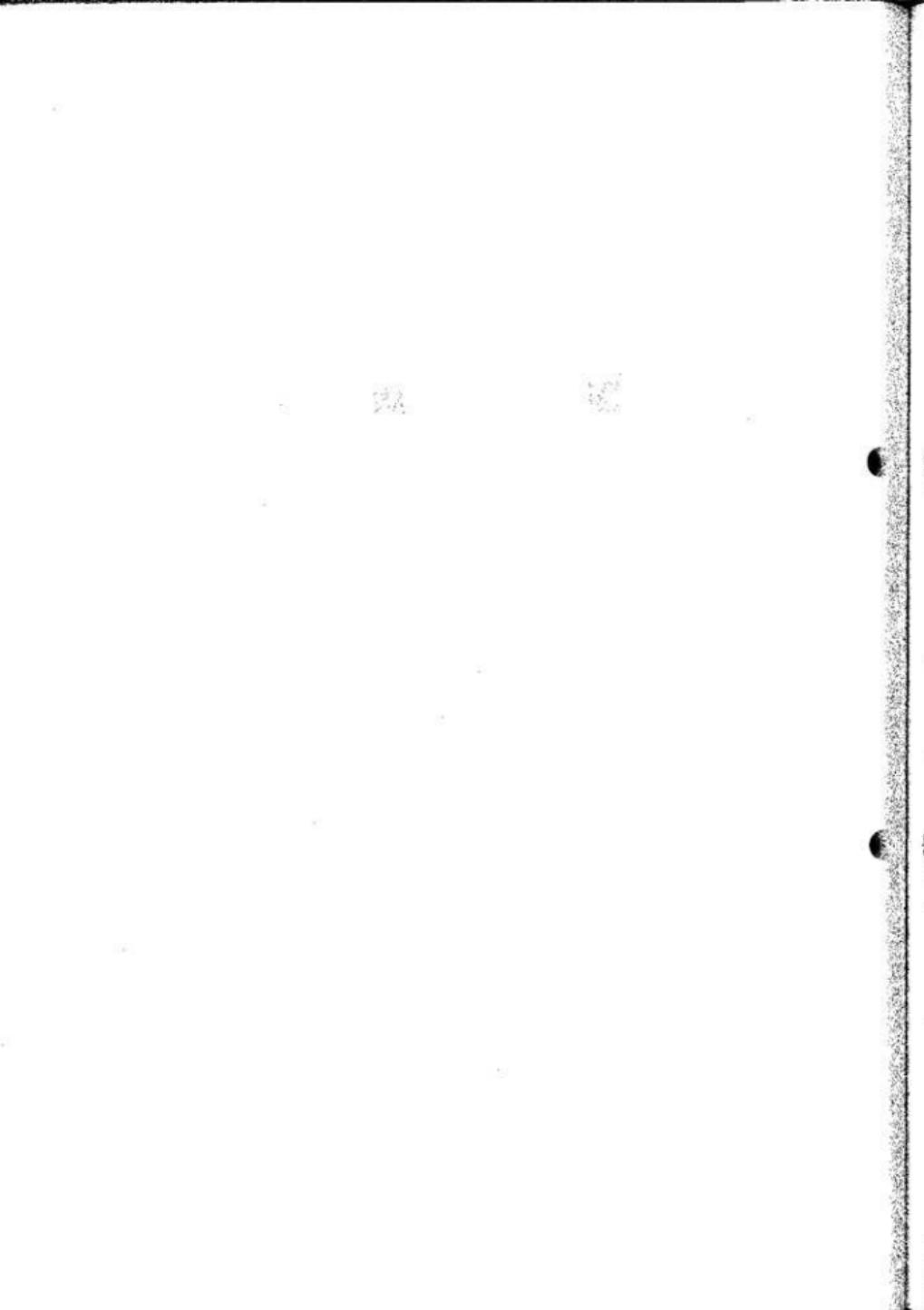
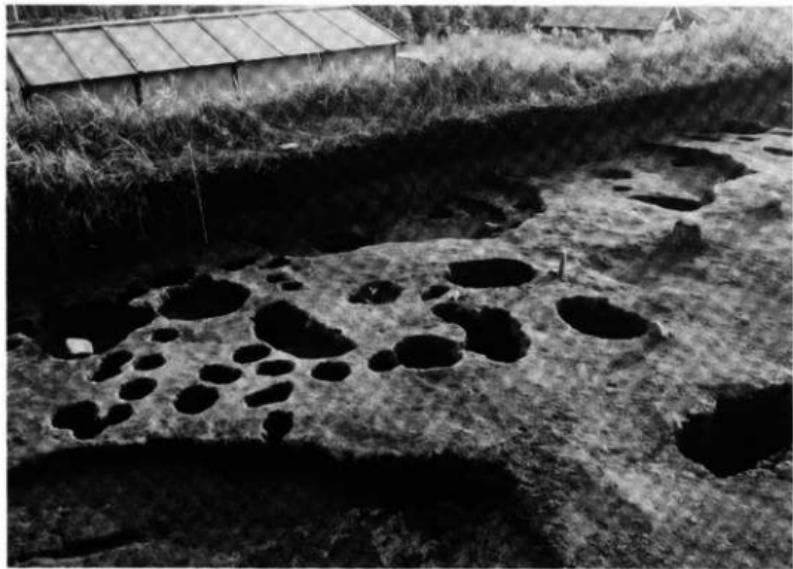


圖 版





A 地区遠景（北から）



A 地区竪穴住居とピット群

図版  
2



B 地区竪穴住居群（東から）



B 地区竪穴住居群（南から）

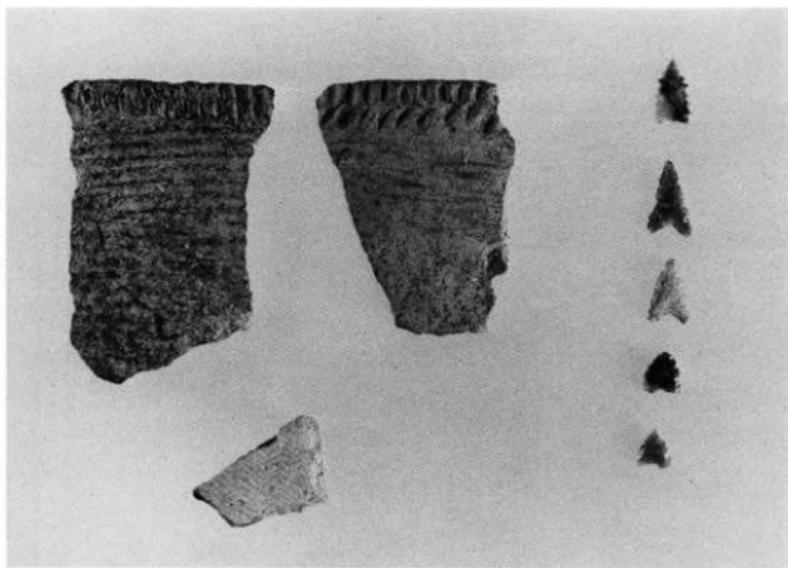


C 地区堅穴住居群（北から）

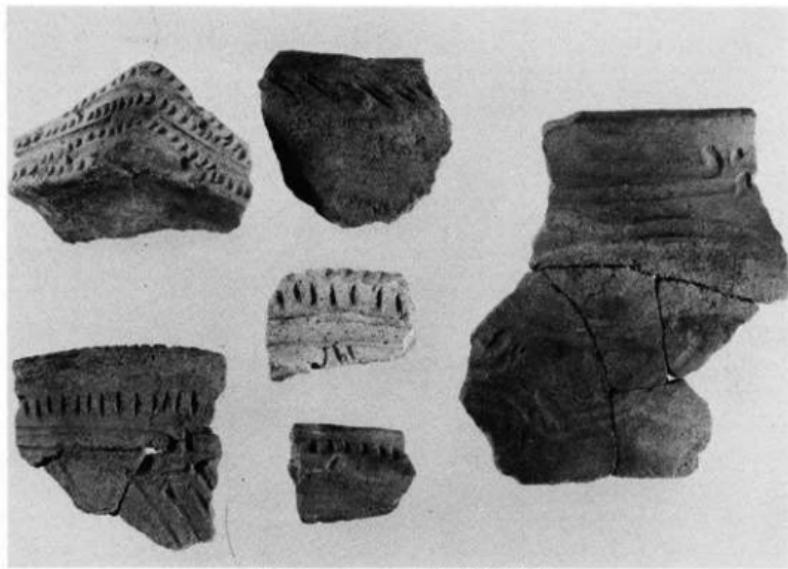


A 地区縄文後期土器出土状況

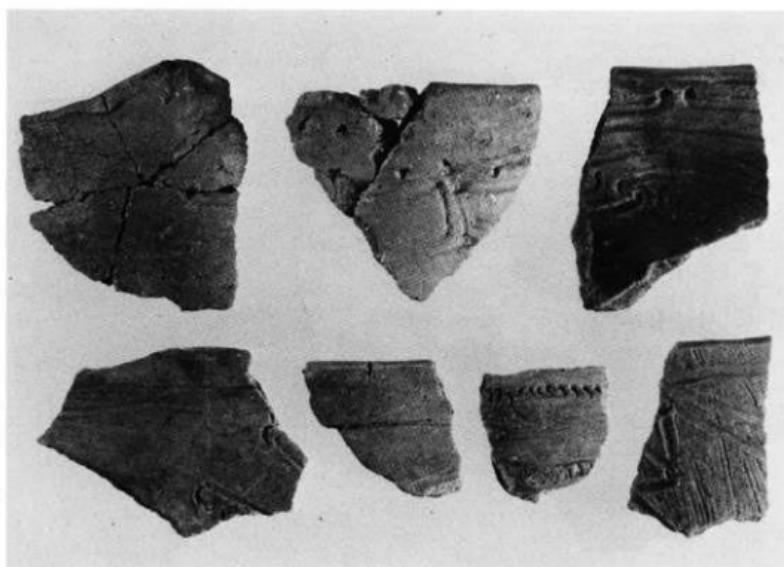
圖版 4



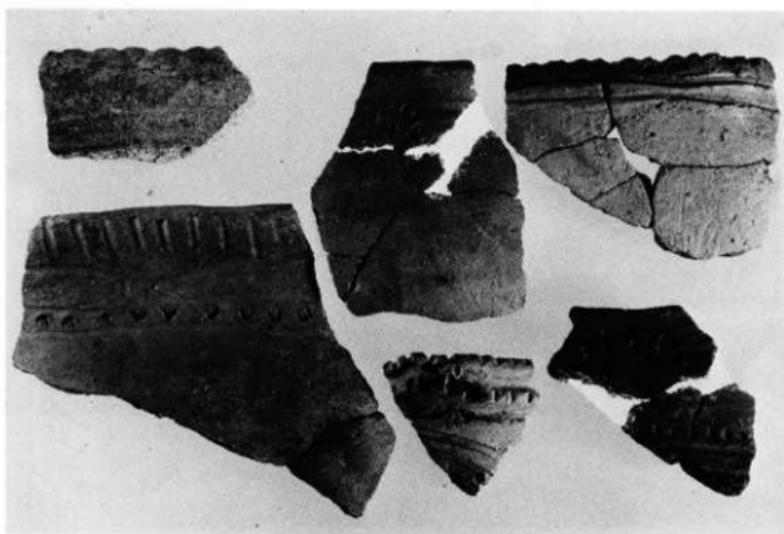
縄文早期土器・打製石器



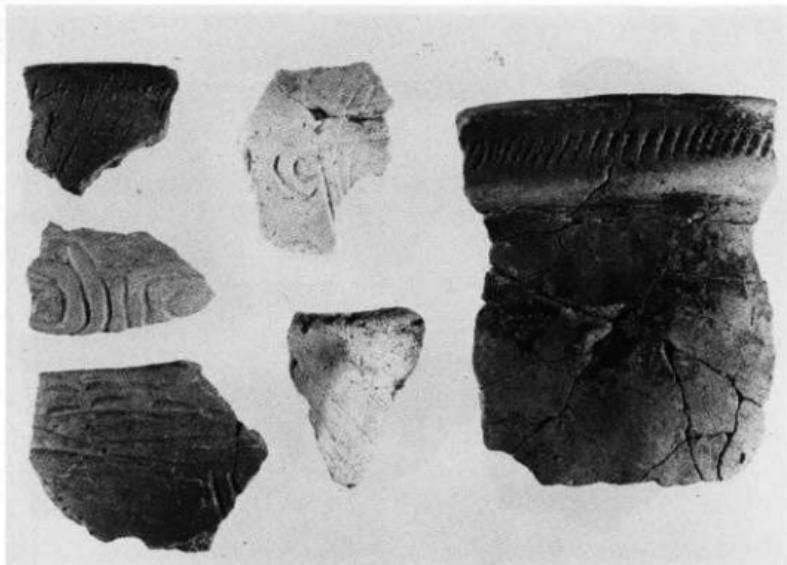
B 地區 SA 2 · SA 3 出土縄文土器



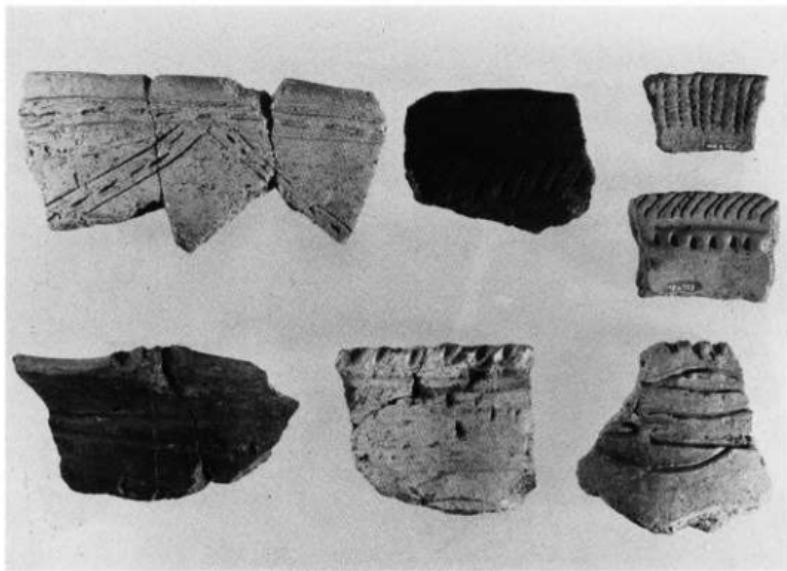
B地区SA3出土縄文土器



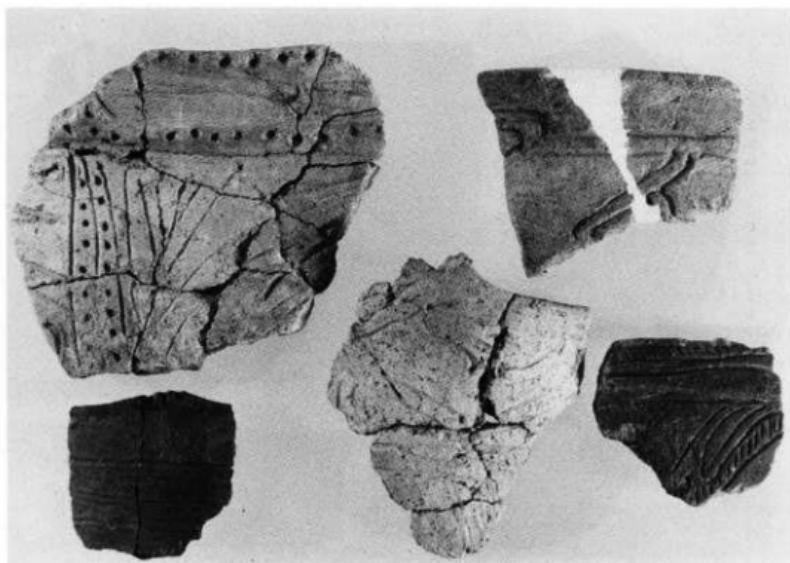
B地区SA4・SA5出土縄文土器



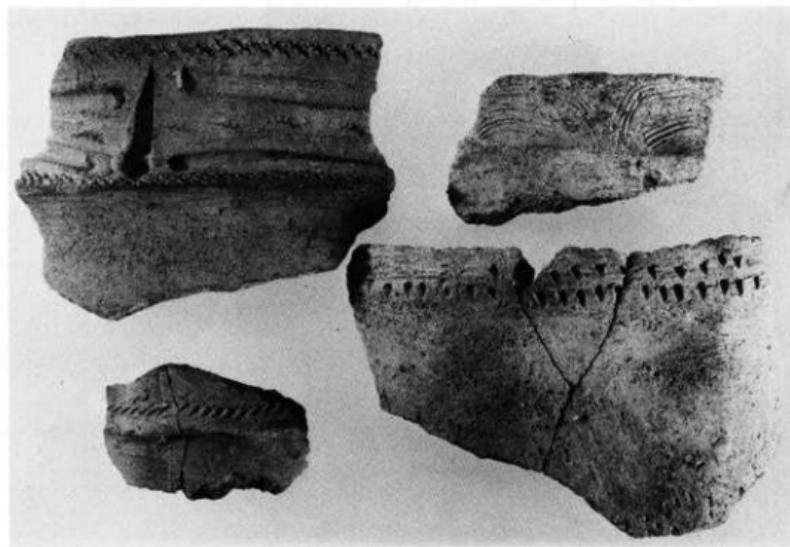
B地区SA8出土縄文土器



B地区SA8縄文土器

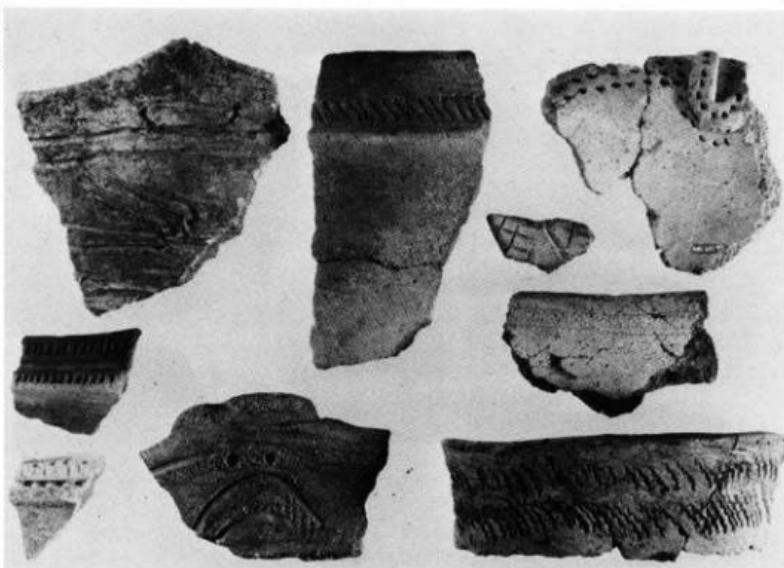


B 地区出土縄文土器

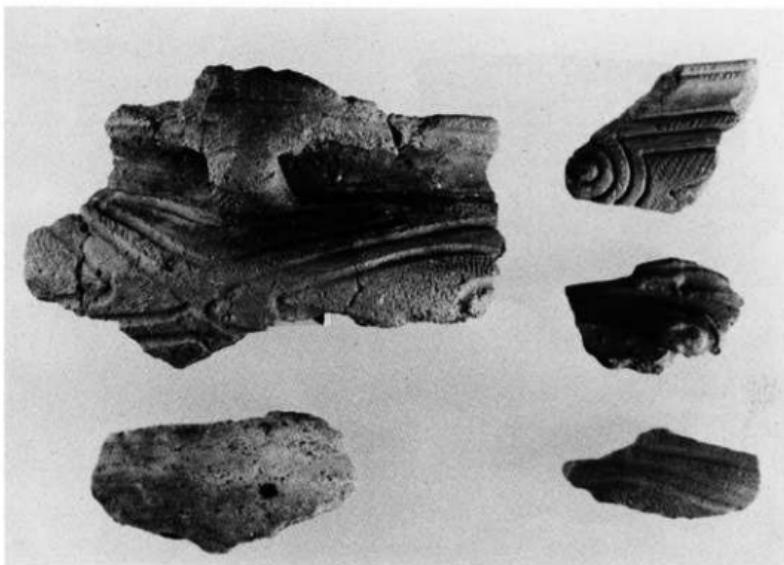


B 地区出土縄文土器

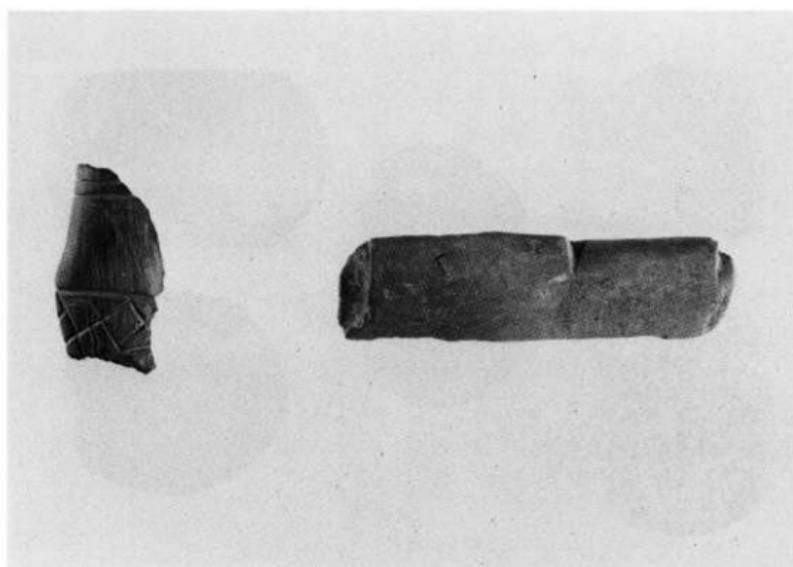
図版 8



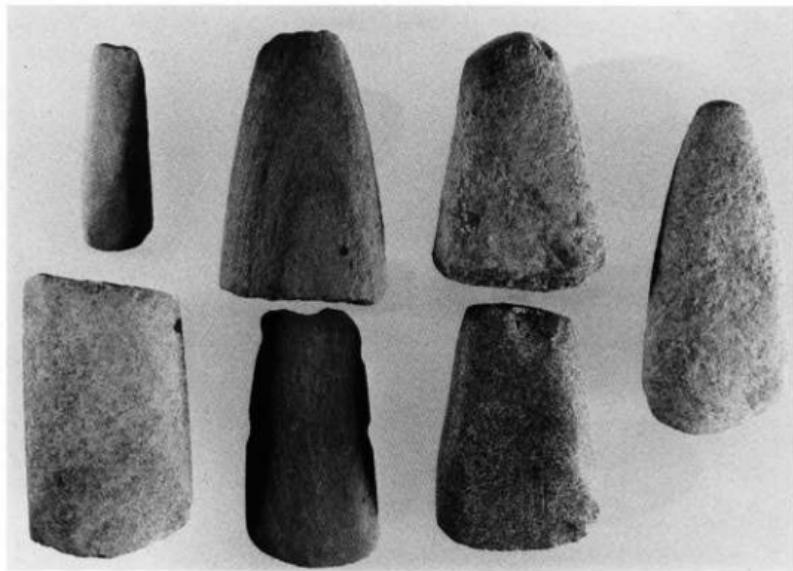
C地区SA1出土縄文土器



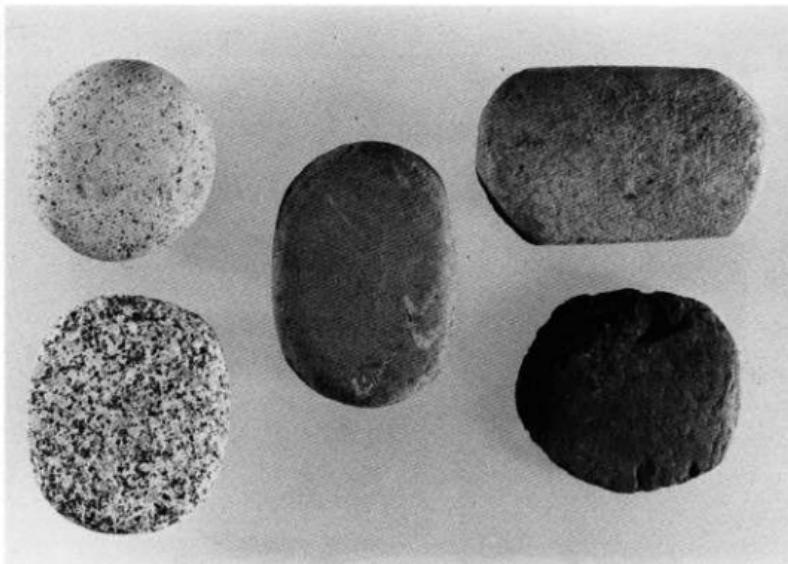
A・B地区出土磨消縄文土器



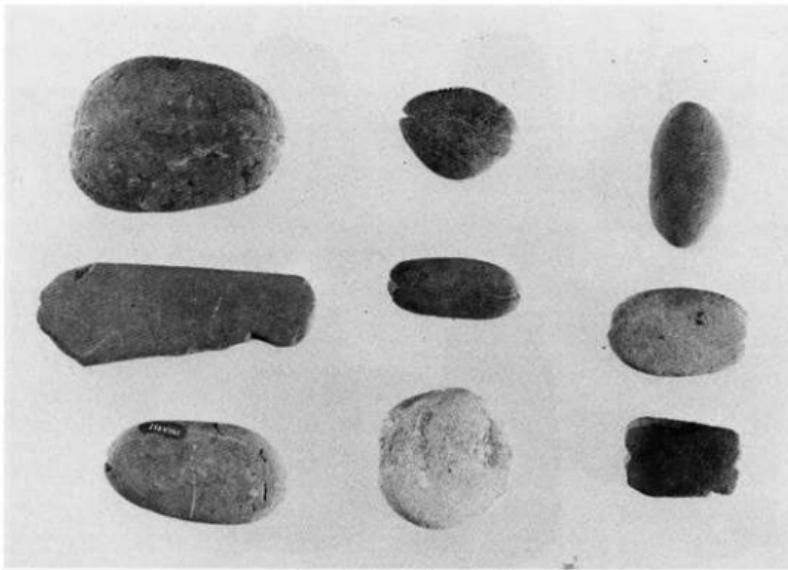
B 地区出土石刀



A・B 地区出土磨製石斧



A・B地区出土磨石・敲石・円板状石器



A・B地区出土石錐

田野町文化財調査報告書 第4集

丸野第2遺跡

発行年月 1987年3月

編集・発行 田野町教育委員会

印 刷 昭 和 印 刷